

障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第3回

あたたかさの伝え方

千葉 晃央

ある方は、40代の男性で父と二人暮らし。知的な障害をお持ちで、伝統工芸のある工程の仕事を任されてきました。その仕事での収入と障害者年金で暮らしていました。

ある時、同居していた父が亡くなりました。初めての一人暮らしになりました。そのタイミングで徐々に仕事も減ってきて、収入も厳しくなっていました。40代からの一般就労は難しく、生活のリズムをつけるためにも、そして人間関係を社会化するためにも初めて通所施設で働くことになりました。施設選びの中で、比較的工賃が高いところの方が経済的に助かるという理由から、ある施設に通うことになりました。

働いてきた誇り

これまで自宅で一人の仕事を長くされてきました。自分のタイミングで、仕事をして、休む。自分のペースで仕事をしてきた40代までの人生でした。そこからの大転換です。朝起きて公共の交

通機関に乗って通い、そこで他の人と一緒に一日を過ごすことになりました。なおかつ納期がある仕事もあったり、自分より若い職員から作業の質についての要請もあったりという生活になりました。

支援する側としては、個人で仕事ができるぐらい手先も器用でベテランさんでしたので、その力を社会につながる仕事に活かすことで、これまで以上の喜びにならないかなと思っていました。

会話も数は少ないですが必要なことは伝えてくれます。「言語化」するのが一番大事なので、私たちが声を掛けますし、その方も少しずつですが言葉は返してくださいました。

一方でこれまで自分でやってきたという自負も持っておられるようにも感じました。施設に通うようになって1ヶ月ぐらいたつと話しかけられるのが煩わしい様子も見られました。一人暮らしも初めてで、自宅にヘルパーも入っていました。それでも身だしなみのところで、洗濯やお風呂に入ることが定期的にできていない様子が見えてきました。夏に近づくと臭いもあり、衛生面での心配も出てきました。

作業中、ご自身の作業が終わると、次の仕事の資材を自分の判断で取りに行き、どんどん進めているときがありました。実は、次の資材は限定商品でさっき作業をしていたものと微妙にデザインが違うものでした。それらが混ざってしまうことになりました。

ご本人が一番困っている

職員は普段から数の間違いを防止するために、切りの良い数の分だけ資材を作業台に持ってきます。みんなで作業をして、できた数も確認して、出荷用の箱に梱包をして片づけます。それから次の資材を作業台に出すという手順で作業をしていました。そのため、資材が混ざることには避けなければならないことでした。限定デザインで見分けがつきにくければ、なおさらです。そこでそのこ

とを伝えると顔をパイと横に振り、立ち上がって、立ち去ってしまうことがありました。時にはそのような場面の後、いつの間にか早退をしていることもありました。そんな「行動化」が数回あり、職員との関係もあまりスムーズでない様子がありました。また、言葉も少なく、他の働く方との会話もあまりありませんでした。

そうこう過ごしているうちに、体調を崩して休むことがありました。電話が苦手のように連絡もない時がありました。施設長が家をのぞきに行くと、自宅におられて、ほっとしたこともありました。進行性の持病もお持ちで、そのため定期通院も必要でした。その通院は滞りがちでしたが少しずつ進行している様子もみられて心配していました。ごきょうだいは弟さんが一人で、別の県にいました。気にはかけてくれていましたが、いかんせん遠方でできることに限りがありました。そのため体調の悪化はよくないと支援者たちは感じていました…。





こういう時、支援者チームはストイックに「自分たちのかかわりの影響が原因である」と捉えて考えます。その姿勢を失ってはいけません。つまり「身体化」という捉え方です。ご本人には思いがある。それを共有したり、伝えたりすることができず、体にも出てしまっている。だとすると、それはよくないことです。体に語らせてはいけません。「体がしんどい」というのは人として、一番苦しい時の表出です。百歩譲って、事実でないとしても、体調を理由にして発言をしないと認めてもらえないというのはやはり苦しい状況です。体のことを出せば話は通りやすいので最終の手段を選択しているわけです。支援者は「このままではいけない!」と思いました。

手が「あかぎれ」になる季節になりました。その方は栄養面、温度管理が難しいのか「あかぎれ」が目立ちました。ご自身の対策は指にテープを巻

くというものでした。そのテープも変色してしまし、指についた粘着部分のところにゴミがつき、汚くなってしまっていました。時には医療用テープもないのか、セロハンテープを代用していることもありました。

給湯器の前で二人…

そこで、手を洗うことにしました。施設の温かいお湯で、職員がゆっくりこすって汚れを取ることにしてみました。年下の職員に手を洗われるのは嫌かな?とも思いました。はじめは戸惑っておられました。しかし、きれいになっていくと「…そんなにしてくれるんか?」とポツリ。洗っていると手の力を抜いて、身を任せてくれているよう

になっていきました。きれいになるまで洗い、タオルで拭きました。週に数回そんなことをしていると何回目からは、「ありがとう」とおっしゃったり、自分で給湯器のある台所で職員を持っていたりするようになりました。いつの間にか職員のことを「そんなことまでしてくれる人」と思ってくれるようになりました。手を洗いながらの会話も弾みました。「(職員の) ○○さんは何人で住んでいるん?」「子どもはいる?」「大切にしないといけないよ」…そんなことを話すようになりました。他者への興味がわいてきたのです。

人生の門出を支えてきた功績

そこでの会話が進むと作業時間でも、以前よりコミュニケーションが増えました。その中で「できたから、次の資材とるよ?」とか、「これであっている?」など伝達もしてくれました。正確な作業を行うことで、みんなと協力してやり遂げることができていきました。ますます周囲からの信頼は厚くなり、作業場でも休み時間でも友人たちとやり取りが豊かになりました。作業に対する力も発揮されるようになりました。「これ、誰が使われるんや?」「どこで売っているん?」と自分が作業したものがどう使われるのか?どこで売っているのか?にも興味をもってくれました。

もともとこの方がしていた作業は結納品の仕事でした。自分の仕事がどういう時に使われて、その場が人生においてどういう大事な時期かを理解して自分の仕事にやりがいを感じてきたことが伺われました。

ここでは言語コミュニケーションではなく、一緒に手を洗うことが変化のきっかけになりました。洗いながら、おしゃべり(言語化)が弾みました。

肌と肌との少しの触れ合いは言葉でのやり取りより、よほど安心なものと感じてくださったのかもしれない。その後、急な持病の進行もなく過ごされていきました。

前回の連載を受けて、身体化、行動化、言語化について事例を通して取り上げました。実際に支援でやるべきことが明確になり、支援者としてはとても助かる経験でした。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

1.福祉の独自性とは

対人援助学マガジン 43号

2020年12月

「援助職の未来 1~2」

対人援助学マガジン 41~42号

2020年6月~2020年9月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16号

2014年3月

「障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会」

対人援助学マガジン 6号

2011年9月

「1 工程@1円~知的障害者の労働現場 1~40」

対人援助学マガジン 1号~40号

2010年6月~2020年3月